

archive
vol.36

A-Lab Exhibition Vol.34

A-Lab Artist Gate NEXT STEP

2016 年出展

吾郷 佳奈 Ago Kana

2017 年出展

稲垣 美侑 Inagaki Miyuki

2017 年出展

木原 結花 Kihara Yuika

2020 年出展

大東 真也 Daito Masaya

A-Lab archive

「A-Lab Artist Gate NEXT STEP」

尼崎市が運営するアートスペース「A-LAB」で毎年開催している新鋭アーティスト発信プロジェクト「A-Lab Artist Gate」。大学、専門学校を卒業、あるいは大学院を修了した若手アーティストによるグループ展として開催しています。

「A-Lab Artist Gate NEXT STEP」は、過去に「Artist Gate」に出展いただいた若手アーティストがその後、どのようにステップを上がっているかを追いかけて紹介することで、これからの活動を応援します。

A-LAB archive vol.36

A-Lab Artist Gate NEXT STEP

目次

■ 出展作家	1
吾郷佳奈	1
稲垣美侑	5
木原結花	9
大東真也	13
■ 寄稿_大槻晃実(芦屋市立美術博物館 学芸員)	17
■ アーティスト・インタビュー	19
■ フライヤー・配布資料	23

■ 出展作品



吾郷 佳奈 Ago Kana

1993年 生まれ。島根県出身。

2018年 京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻油画修了。

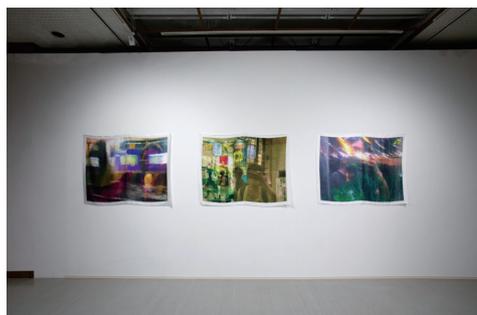
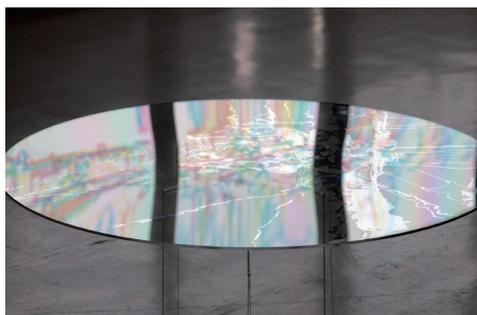
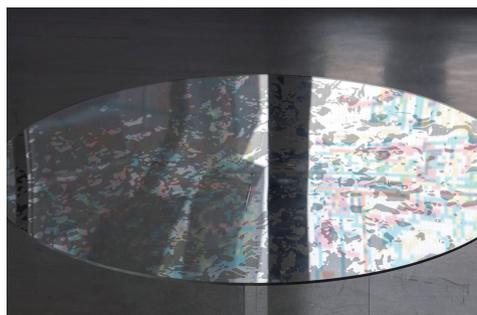
【近年の主な展覧会】

2020 「こえる、境界線」、no-mu/studio 10m、京都

2021 「をちごちのこことこ」、同時代ギャラリー、京都

2022 「VOU/棒 7th Anniversary ARTISTS' FLEA VOU KYOTO2022」、
VOU/棒、京都





■ 出展作品

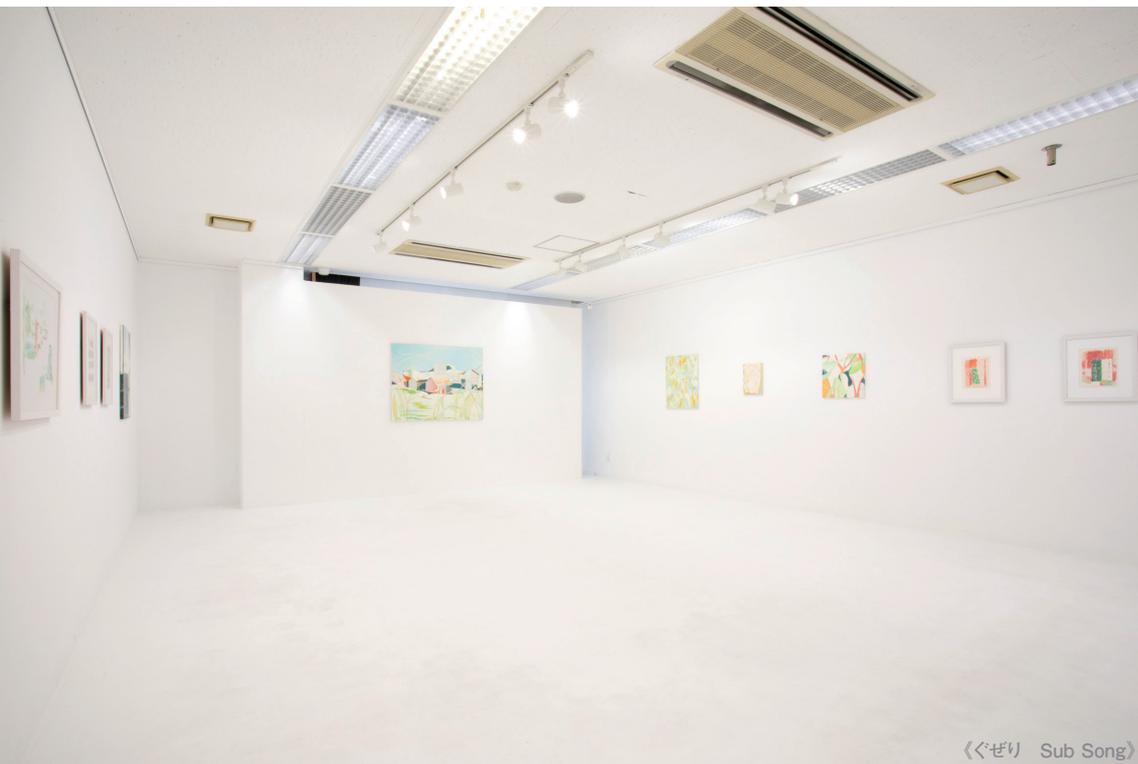


稲垣 美侑 Inagaki Miyuki

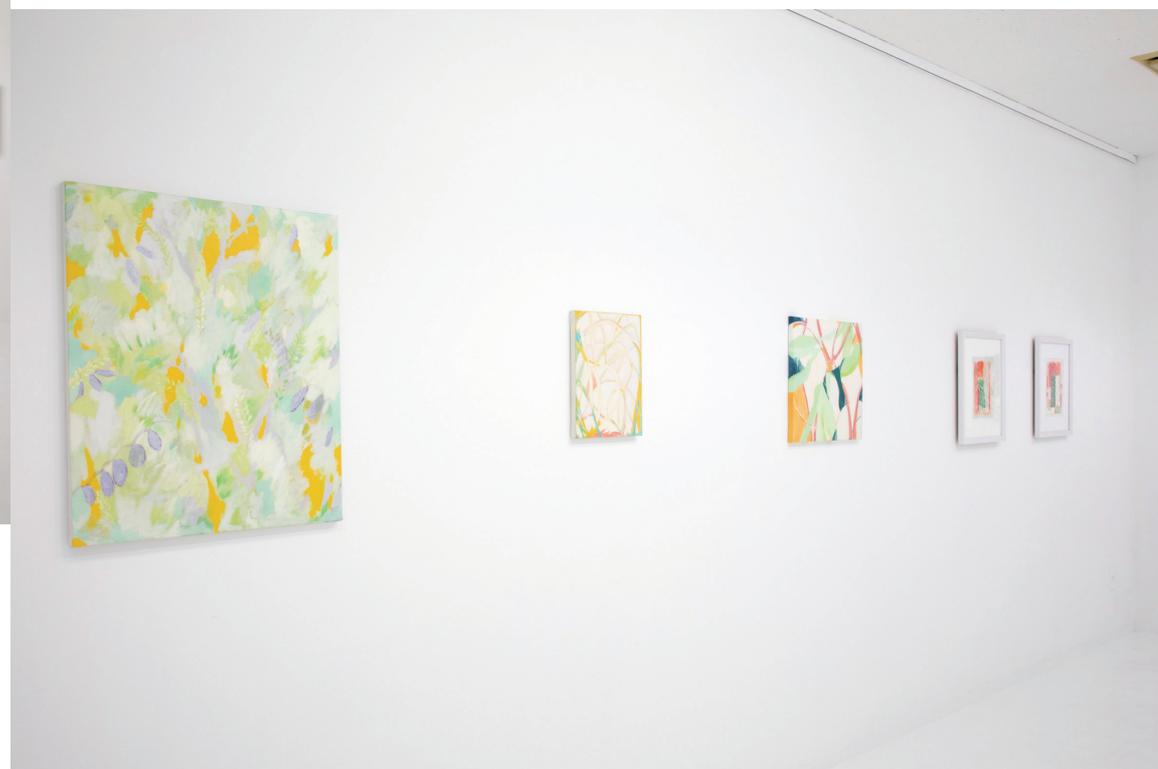
1989年 生まれ。神奈川県出身。
2014年 東京藝術大学美術学部絵画科油画卒業。
2015年-2016年 ナント美術大学（フランス）に留学。
2021年 東京藝術大学大学院美術研究科後期博士課程修了。

【近年の主な展覧会】

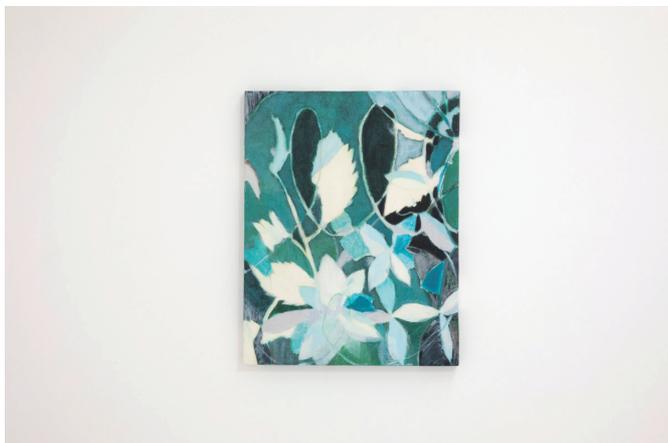
2021 「ぐぜり Subsong」、Clear Gallery Tokyo、東京
2022 「息をする spirare」、Gallery Gigi、神奈川
2022 「草むらの音素」、PlumGallery、東京



《ぐぜり Sub Song》



■ 出展作品



■ 出展作品



木原 結花 Kihara Yuika

1995年 生まれ。大阪府出身。

2019年 大阪芸術大学大学院芸術研究科博士課程前期修了。

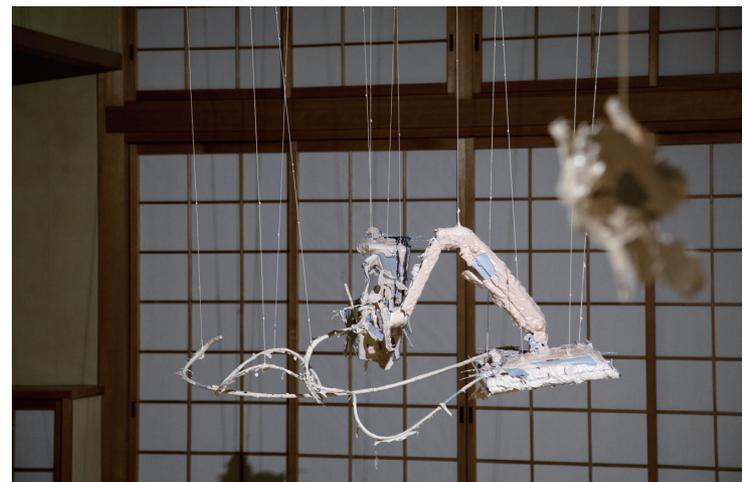
【近年の主な展覧会】

2018 「写真的曖昧」、金沢アートグミ、石川

2019 「BelfastPhoto Festival」、イギリス、北アイルランド

2021 「あざみ野フォト・アニュアル とどまってみえるもの」、横浜市民ギャラリー
あざみ野、神奈川





■ 出展作品



大東 真也 Daito Masaya

1995年 生まれ。滋賀県出身。

2018年 京都精華大学大学院博士前期課程芸術研究科立体領域卒業。

【近年の主な展覧会】

2021 「Time/Age」, ZAB GALLERY, 東京

2022 「創造と喪失の輪廻. Reincarnation of creation and loss」,
KUNSTARZT, 京都

2022 「Kyoto Art for Tomorrow 2022 一京都府新鋭選抜展一」, 京都文化博
物館、京都



〈Loop〉



〈Un Loop〉



2015年10月にオープンした「A-LAB」(旧「あまらぶアートラボ「A-Lab」」)は、尼崎市役所都市魅力創造発信課(当時)の職員によって運営が始まった。尼崎では初となる現代美術に特化して発信する施設の誕生は、美術館やアートセンターを数多く有する阪神間において、美術の土壌がますます豊かになっていくであろう未来を強く予感させてくれたことを記憶する。初年度は、展覧会を2回、トークイベントやワークショップを10回開催しており、関西を中心に活躍する美術家や写真家、建築家等とともに、キュレーター、アートプロデューサー、アートプランナー、ナビゲーターなどが関わり、開館の年を盛り上げた。2016年以降は、年に5回程度の展覧会が企画され、関連イベントやワークショップも数多く開催されている。30代、40代の作家たちが新しい実験的な表現に挑む場面も多く見られ、運営側の柔軟な姿勢に感嘆しきりだ。2019年以降のコロナ禍でも、安全対策を徹底しながら事業を展開し、「のんびりと心が休まるスペース」としても存在していた。現在も、尼崎にゆかりのある作家を応援しながら、様々な地域で活躍する美術家やアート関係者を招き、活気ある好企画の開催を続けており、尼崎市民のみならず他市から多くの人々が「A-LAB」へ足を運んでいる。

数多くの展覧会の中でも注目されるのは、2016年からスタートした大学や専門学校を卒業、大学院を修了した若手アーティストを応援する新鋭アーティスト発信プロジェクト「A-Lab Artist Gate」だ。7年間で47名のフレッシュな顔ぶれが尼崎で発表し、現在も作家活動を続けている者も多い。2022年は、本企画に参加した若手作家たちのさらなるステップへと応援することを目的に「A-Lab Artist Gate NEXT STEP」として再発進した。参加した4名のアーティストたちは、過去の経験を振り返りながら熟成させる時間を得たことで、より柔軟な表現が立ち現れたことだろう。以前にこの場所で展示した彼らだからこそ、施設の構造や場の特性を再考することができ、より深いアプローチができたのではないか。また、彼らの表現に再び出会えたことで、鑑賞者は作家が歩んできた時間、変容してきた表現など、彼らの成長を感じられただろう。

第1回目となる本展には、吾郷佳奈(2016年参加)、稲垣美術、木原結花(ともに2017年参加)、大東真也(2020年参加)の4名が参加した。彼らには、前回参加した時とは別の展示室がそれぞれに配置された。

油画を専攻した吾郷は、「自画像の方法」というテーマのもと、鏡に映るその場の事象を鏡面に修正液でトレースする表現で知られる。現実の世界を統合するように重なる線描は、見る位置によって様々に揺らぎ、向こうとこちら側の世界とのズレを生み出す。そこには、認識の曖昧さ、世界の複層性を感じさせるきっかけが潜み、この世界を知るための作法が更新されるような感覚を生じさせる。吾郷は、2016年の展示作業で作品に照明を当てた際、鏡に描かれた白線が反射し、影となった黒線が展示壁面に映し出されたことに驚き、思いがけず出会えた発見に感動したという。今展では、ネガとポジの関係をもった美しい線描の世界を現した作品とともに、尼崎の風景に出会う中で率直に感じた部分を実験的に表そうと、ガラス越しに見える風景とそこに映る自身を撮影した写真や、窓ガラスの外側に広がる街並みをトレースした作品を展示していた。反射の中の内側の世界から、向こう側へと限りなく拡がる世界へ、吾郷の意識は向かっている。

絵画やガラス作品を用いてインスタレーション作品を展開している稲垣美術は「住まい」をテーマに制作を続ける。稲垣は、自身が訪れた街やその環境をモチーフに、そこに暮らす人々の温度を想像しながら描いている。(註¹) その場に赴き自身の体温を交差させることで、そこに住む人々の暮らしへとイメージが導かれるような独自の風景画を生み出す。描かれるその風景は、名も知らぬ土地なのに懐かしさを感じるのなぜだろう。それは、稲垣の風景と、観る者の個人の記憶や纏わる体温が交わり、それぞれが抱く「家」がイメージとなって立ち上がるからかもしれない。今展では、庭や散歩道などを起点に表現を展開した「ぐぜり」というシリーズの風景画が展示された。ぐぜり(口ずり)とは、小鳥が周囲の鳥たちの鳴き声などに学びながら固有のさえずりや歌を生み出す過程を指す。人間や自然、社会が成長していく日々、そこで得られる経験を「ぐぜり」になぞらえることができるのではと考えたという。稲垣の作品は、我々が身を置く環境へと目を向けさせ、見る者の経験を振り返るきっかけを与えてくれる。

高温にすることで柔軟な性質を持つようになるガラス瓶は、吊るしながら熱を加えると自重によって有機的な形へと変化する。2020年に参加した際、大東真也は和室に枯山水を出現させ、そこに生命体のように変容したガラス瓶を配置した。大東はそれまで単体でオブジェ的な作品を制作していたが、本展ではインスタレーション作品を発表し、空間にアプローチすることで自身の作品が展開していく手応えを感じたという。今展では、大きな窓を背に変形したガラス瓶を大量に吊るしたインスタレーション作品を設置した。外光によって煌めく緑や青、透明な色のガラス瓶は、隣接する尼崎の家々を背景に美しい風景を生み出していた。一方、(展示スペースとなった)倉庫ではボカリスウェットのリターナル瓶がリサイクルされる仕組みに目を向けた作品が並んでいた。社会を循環させる目的に生み出されたこのリターナル瓶は、デザイン性も相まって人気を博し、その目的とは別の要素によって、理想とした循環から大きく距離をとることになった。人間の欲望で止まってしまったその循環を大東は引き受け、その瓶の価値を作品として昇華させる試みをおこなっていた。本作が、他者のもとへと巡り、新たな循環を生みだすかもしれない。その未来も興味深く立ち上がってくる。

写真学科を卒業した木原結花は、2017年の初参加の際、新聞や警察が発表する身元不明の遺体「行旅死亡人」の記事をもとに、その人物を想像してパソコンでモニターजू写真を制作し、オブジェクトと共にインスタレーション作品として発表した。制作のきっかけは、木原が幼少の頃、夏休みに仲良くなったホームレスの「豆腐おじさん」を思い出したことだったそうだ。遺影のようなその写真は、みな笑顔である。彼らの死をイメージするのは容易くないが、必ず訪れる死について考えさせられた。今展では、写真という領域を超え、地面に落ちているものや建物をシリコンで型取り、プラスチックで成形したオブジェを和室の天井から吊るしていた。木原は「いつ死ぬか」「いつ制作ができなくなるか」を考えた時、心のままに制作してみようと考えたという。型取りが不十分で成形がうまくできなかった部分などもそのまま用い、多様な状況の中で生まれてきた形を組み合わせ、不思議な姿を生み出した。実験的な方法を用いた今作のコンセプトに触れることは難しいが、様々な方法を試していこうとする姿勢に、今後の期待を込めたいと思う。

本施設は2022年に「A-LAB」と名称を新たにした。この改称は、開館7年目を迎えた「A-LAB」が、これからも尼崎から多様な美術を発信していくため、作家と共に一層の飛躍を目指していこうという彼らの気持ちの表れと感じている。現在も「A-LAB」は行政職員が中心に企画を続けている。アートセンターとして、柔軟な発想、作家へのサポート、ネットワークの軽やかさのみならず、美術ファンや鑑賞者への愛ある姿勢を保ち続けようとするその気持ちは、尼崎という地域を文化の街としてますます成長させることだろう。様々な環境の変化も乗り越えていくであろう「A-LAB」を、これからも注目していきたい。

註¹

長谷川祐輔「生活の音楽と「ぐぜり」ことについて」2022年9月20日

<https://www.miyukiinagaki.com/texts-notes-review2022> (最終アクセス: 2022年10月30日)

備考

彼ら4人のインタビューがYouTubeで公開されている。

<https://www.youtube.com/watch?v=2zm26Kz7lyl&t=855s>

また、過去の展覧会やイベントのアーカイブが公式ページでみることができる。

<http://www.ama-a-lab.com>

大槻 晃実 (おおつき あきみ)

芦屋市立美術博物館学芸員。専門は近現代美術。近年の主な展覧会に art trip vol.03 [in number, new world / 四海の数] (2019)、「芦屋の時間 大コレクション展」(2020)、「美術と音楽の9日間 rooms」(2020)「植松室二 みえないものへ、触れる方法—直観」(2021)、「限らない世界/村上三郎展」(2021)など。

Q1. 前回 (2016 年) の展示からの変化について

前回の「A-Lab Artist Gate2016」に出展してから6年ぐらい経ちます。当時はまだ大学に在学中でした。美術に関する共通言語を持った人たちが周りにいる、作品を見せ合うことのできる環境から、今は全く畑違いのところで働きながら作品を作っています。

そういった場出会った方々に作品を観ていただく機会が増えたことがすごく大きいです。みなさん全く背景が違いますが、その中で私の作品を観に来てくださったりとかして。その時にもらえる、あまり気を使いすぎないような素直な感想をもらえることとか、そういうのが面白くて。美術のためだけでなく、そういう人たちにきちんと届くようにしたいなど。自分自身は内向的な作品を作るタイプだと思っているのですが、それを開いていきたいという感覚に変化してきたというのが一番大きいところだと思っています。

Q2. 今回の展示作品について

普段は「自画像の方法」というテーマで作品を作っているのですが、今回はA-LABに引っ張ってもらう形で、自画像から離れた作品を作ることに挑戦してみました。尼崎までたびたび来るなかで、川の水面の様子だったり、移動の道中でのガラスに映る自分と同化した周りの風景とか、ROOM1から見える風景が緩やかに変わっていくところとか、ROOM1の変わった構造だったりとか。素直に面白いなど感じたところに実験的にアプローチしていくような作品づくりをしました。

Q3. 今後の活動について

ここ数年京都で活動をしていて、制作も発表も全て京都で行うことが多かったのですが、今回尼崎に久しぶりに出てきて、拠点から離れた場所で作品制作、発表活動を展開していきたいなどと改めて思いました。そういう機会を増やしていけたらいいと思っています。



Q1. 前回 (2017 年) の展示からの変化について

5年の歳月が流れましたが、その5年の間に私は大学院を卒業し、その後同大学の博士課程に進学しました。今はさらに博士課程を修了した後に画家として絵を描きながら、また美術教育の仕事にも携わらせていただいています。2017年に作品展示をさせていただいた時には、家をモチーフにしなが、様々な土地を訪ね歩きながら、「暮らしの見える風景」や「家の構造を読み解いていくような絵画表現」を中心に展示させていただきました。今回の展示ではそこから5年経過した中で、より個人々の足元を見つめ直すような制作の一環として「庭」をテーマとする作品から派生した「ぐぜり」という絵画作品の一連のシリーズを中心に展示を構成させていただいています。

Q2. 今回の展示作品について

「Artist Gate NEXT STEP」で今回展示させていただいている作品は、全体のタイトルを「ぐぜり Sub Song」としています。「ぐぜり」というのはちょっと聞き慣れない言葉だと思いますが、実は春先によく耳を澄ませていると、周囲環境で鳥たちが何か歌を歌い始めているんですね。その音が最初は拙い音で練習をしていき次第に若鳥が成長していくにつれてその鳥固有のさえずりが歌えるようになる。そのプロセスを総称して「ぐぜり」と言われています。その言葉を聞いた時に何かその「ぐぜり」というものがただ単に鳥だけの話におさまらずに、例えば人間であったり、あるいは自然の成長、社会の動きであったりしても、そういう「何か得るために1つ1つを積み重ねていくような「ぐぜり」のような期間というものがあるのではないかな？」という風に想像し、「ぐぜり」というタイトルを決めました。完成したさえずりの手前の「ぐぜり」はどこかごちない様な音の響きが広がっていますが、そのぐぜりに耳を澄ませることで、「自分の身近な周囲環境にも意識を巡らせることができるのではないかな」と考えています。今回の「ぐぜり」の展示では鳥の鳴き声を発端に、そこから庭先や散歩道などに広がっていた風景を1つの起点としながら絵画表現に落とし込んで展示を構成させていただいています。ぜひ尼崎の土地を足元レベルで観察しながら、楽しんで過ごしていただくきっかけの作品となれば幸いです。



Q3. 今後の活動について

今後の制作活動としては、三重県亀山市で開催される「亀山トリエンナーレ 2022」に参加させていただく予定です。もう1つは関東の「埼玉県立近代美術館」でのグループ展にも参加させていただく予定です。いずれも2017年からの流れを引き継ぎながら、現在テーマとしている「庭」を中心とした作品展開をお見せできればと思っております。三重や関東にお越しの際には是非ご覧いただければ嬉しいです。

※インタビュー時の情報です。



Q1. 前回 (2017 年) の展示からの変化について

大学を卒業してから作家活動を続けていくのは難しいですね。金銭的な問題もあるし、仕事で制作時間が削られていくと、どうしても制作にリソースを回せなくなってしまう現状ではあったんです。でもそうは言ってもいつ死ぬかわからないし、制作することができなくなる状況になる可能性を考えたら、今まで作ってきた作品とは全然違う文脈になってしまうから、この思いついたアイデアはやめといた方がいいな、とかそういう風に考えて今までつくろうとしなかった作品とかあったんですけど、今までの文脈とかあまり考えすぎずに、思いついた「こんなもの作ってみたい。」と思ったものを作ってみよう。という考え方になりました。

Q2. 今回の展示作品について

今回の作品は、道端に落ちているものであったりとか、地面であったりとか、建物であったりとかを型取りシリコンで型取って、その型取ったものにプラスチックを流し込んでいる作品です。技術的に未熟な面や型取っている対象物との相性の悪さなどが原因で、型取ったシリコンが破けてしまったり、穴が開いてしまったりとかしてしまうんです。その穴が空いたり破けたりした状態で液体プラスチックを流し込んだり、破けてバラバラになってしまった型を自分なりに再構成して、その形に液体プラスチックを流し込みました。そうすると「なんだこれは。」みたいな形になったり、よく分からないものになったりするんですけど、その出来上がったものには、型取る対象物が存在している時間と空間と、その対象物に対して私がシリコンを塗ったときの身体の動き、そしてまたそこに塗っているときの時間と空間と、それを剥がして破けたり穴が空いたりした型を再構成する時間と、その際に生じる空間であったりとか、そういうさまざまなプロセスを経て蓄積されてきた時間や場所、空間、そして身体の動きを1つにギュッと凝縮した作品になったのかなと思います。方法論が先行した実験的な作品で、最近は方法論に意識が向いています。



Q3. 今後の活動について

今までは平面の作品であったり、写真を扱ってきましたが、これからは今回立体を展示したようにいろいろな展開をしていきたいです。今まで写真の作品だったからとか、写真学科卒業だからという理由で写真以外の表現方法を諦めていたりする部分もありましたが、そういうことに縛られずに制作を続けて行けたらいいなと思います。もちろん写真表現をやめるとかではなく、立体の作品を作ってみると、平面の良さ、写真のもつ特性であったりとかを逆に意識できたり、考えが深まった部分もあるので、平面や写真でも思いついたら制作して行けたらいいなと思います。



Q1. 前回 (2020 年) の展示からの変化について

前回出展させていただいた際は、和室で空間を作るような展示をさせていただいていたんですけども、実はあのタイミングぐらいから、どんどん空間を作るというようなことを取り組んでいます。最初に展示させていただいたところから発展して、展示台に置いて展示することが多かったんですけど、そこからどんどん作品のスケールを大きくして、いっているようなことをここで展示して、からずと取り組んでいます。今回はそういった作品と、もう1点別でちょっとコンセプトに寄せた、汲み取ってもらいやすいような作品の2点の展示をしています。

Q2. 今回の展示作品について

今回の展示は、今年か去年ぐらいから取り組んでいる瓶を大量に吊るして空間を作っていくというような作品を1点、展示しています。もう1点は先月に新しく発売されたとある瓶を使用して作品を作っているんですけども、いわゆるフリマアプリなどで高額転売されているものをあえて購入して、「物の価値」みたいなところを考えさせるような作品を展開しています。

Q3. 今後の活動について

今後の制作活動についてなんですけど、今こうやってたくさん機会をいただいているところではあるのですが、作品に合わせて展示したい場所を探して、そこで1つの作品を作ったりできればという風に考えております。





A-LAB Exhibition Vol.34
2022/8/20(sat)-9/25(sun)

STEP NEXT STEP NEXT STEP
A-Lab Artist Gate

吾郷 佳奈 Ago Kana
 稲垣 美術 Inagaki Miyuki
 木原 結花 Kihara Yuika
 大東 真也 Daito Masaya

1F 100m
2F 200m

エントランス・倉庫
大東 真也 2020年出版
 ① 《睡りの子》ガラス瓶、(H)300×W)200×D)450mm (2022)
 ② 《Loop》ガラス瓶、(H)80×W)20×D)60mm (2022)
 ③ 《In-Loop》ガラス瓶、(H)10×W)50×D)250mm (2022)

ステートメント
 主にガラス瓶の廃製品に熱を加え変化した作品を発表しており、何十本のガラス瓶が溶け合ってきた場のような作品と、ガラス瓶の骨の折れた作品が別冊です。
 熱を加え変化したことで変化する様子を展示する作品や、大量のガラス瓶作品の葉のような装置で遊ぶパフォーマンス作品、空間アプローチをしたインスタレーション作品なども制作しています。

ROOM1
吾郷 佳奈 2016年出版
 ① 《エーデルワイス》
 記録で見た水車を撮りました。
 水の動き、水車の様子、水車の上を飛ぶ鳥を組み合わせています。
 ② 《Blurred boundaries 1-3》サラン布にインクジェットプリント、(1000×1260mm) (2022)
 ガラスに染めた自分の写真を使っています。
 風景と自分自身から、CGのぼかしやフィルターで実験を繰り返しました。
 ③ 《Faded landscape》窓にカッティングシート、(サイズ可変) (2022)
 窓の外の世界を描きました。
 窓がガラス製になっているので、三色の透明シートを使いドット絵のようにしてみました。
 ④ 《Sympathy flower》アクリル板にカラー顔料、(1300×3000mm) (2022)
 窓の中の風景を筆で描いてみました。ソフトを塗ることで、光景が広がります。
 ⑤ 《Our contour》1/4丸ミラーに油性ペン・修正ペシ、(1800×1800mm) (2021)
 鏡に映った人々の動く様子を、鏡に直接書き留め、何枚も重ねました。

2F
A-Lab Artist Gate 出版記録写真

ROOM2
稲垣 美術 2017年出版
 《＜中＞ Subsonic》
 ① 《Vacant lot, on a windy day》水彩・色鉛筆・オイルパステル・テープ・水彩紙、(395×530mm) (2022)
 ② 《Touch of the Garden-01 / 庭の手触り-01》水彩・鉛筆・水彩紙、(280×210mm) (2021)
 ③ 《Summer bushes / 夏の茂み》水彩・色鉛筆・オイルパステル・水彩紙、(280×210mm) (2021)
 ④ 《Swallows in the Garden / 庭のつばき》水彩・オイルパステル・鉛筆・水彩紙、(202号) 227×606mm (2021)
 ⑤ 《Grassy Subsonic / 草むらのかげ》水彩・オイルパステル・鉛筆・水彩紙、(F5号) 910×167mm (2021)
 ⑥ 《Cross Sashia / ガラスメンソウ》水彩・オイルパステル・鉛筆・水彩紙、(F15号) 652×510mm (2021)
 ⑦ 《White eye and Dahlia / 白い目とダリア》水彩・鉛筆・水彩紙、(F4号) 333×242mm (2021)
 ⑧ 《Tulipa gnetriana / チュリップ》水彩・オイルパステル・鉛筆・水彩紙、(F6号) 410×318mm (2021)
 ⑨ 《View from the bright window-01 / 明るい窓辺-01》水彩・オイルパステル・水彩紙、(280×210mm) (2021)
 ⑩ 《View from the bright window-02 / 明るい窓辺-02》水彩・色鉛筆・オイルパステル・水彩紙、(280×210mm) (2021)
 ⑪ 《Breathlight / 呼吸の光》水彩・鉛筆、(F6号) 410×318mm (2022)
 ⑫ 《light, green, roof / 水色・色鉛筆・オイルパステル・水彩紙、(図説) 460×385mm (2020)
 ⑬ 《wind-as-wheeler / 風車》オイルパステル・鉛筆・水彩紙、(F6号) 410×318mm (2019)

ステートメント
 本展タイトル「＜中＞(Subsonic)」は、音の伝わりを文字通りで、不完全な音の響きの呼吸に由来している。音響的な音響的効果や音の伝わりを表現している。不思議な音の伝わりが音色に共通し、色の伝わりによって音響的に正しく聞かせる。ある意味でこれら音の響きや音に響かせる音、人や自然が共存する場所を聞いて、様々な音の響きの存在する音色を捉えたいことを試みている。

ROOM3
木原 結花 2017年出版
 ① 《虚像の瞬間》型押しシロン・プラスチック、(サイズ可変) (2022)

ステートメント
 鏡に写った人や物、建物などを型押しし複製する。
 型に貼った面から溢れ出したプラスチックは、対象物と対象物が存在していた空間や時間とは別にプラスチックを流し込んだ際の時間と空間を表す。
 この作品は対象物が存在している、それらを型取る・型にプラスチックを流し込む、これらの時間と空間を伝えた場である。

A-LAB archive vol.36
 Exhibition Vol.34 [A-Lab Artist Gate NEXT STEP]
 2023 (令和5)年3月 初版第1刷発行

発行 編集 制作 尼崎市 文化振興課

A
L AB

お問合せ先

尼崎市 文化振興課

TEL : 06-6489-6385 (イベント時 06-7163-7108)

FAX : 06-6489-6702

E-mail : amalove.a.lab@gmail.com